

コマーシャルづくりに挑戦！

－ 学校発のお菓子を宣伝しよう －

広島県竹原市立中通小学校 教諭 有松浩司

キーワード：国語科、動画編集、メディア・リテラシー

1. はじめに

高度情報化社会の到来に伴い、児童を取り巻く生活環境は大きく変わっている。学校から帰宅した児童の多くが、テレビやゲーム機、パソコン、携帯電話（スマートフォン）に向かい、多くの映像メディアに触れる日常を楽しんでいる。実際に本学級の児童を対象に実態調査を行った結果、クラスの半数近くの児童が個人用のスマートフォンやタブレット端末を所有し、多くの児童が、1日に1時間以上も Web 上の動画を視聴するという日々を過ごしていることが明らかになった。

このような生活環境の変化の中、国語科教育においては、従来からの紙媒体の文章の読み書きの活動だけでなく、映像から作り手の意図を読み取り、偏った情報に流されない力（メディア・リテラシー）を育てることが重要である。そして、このような力を育てるためには、映像をただ一方的に視聴させるだけではなく、自らも制作者の立場に立ち、映像ができる仕組みを学ばせることが大切であると考えられる。

映像メディアを扱った実践や研究はこれまでも数多く報告されているが、児童自身がある目的のもと、ICT機器を用いて映像を撮影し、動画編集するところまで踏み込んだ実践はそれほど多くは発表されていない。本実践をもとに、児童にどのような力が育ったのか、どのような指導が効果的であるのかを検討することで、小学校国語科における映像制作の可能性について探っていく。

2. 授業づくりのポイント

まずは、メディア・リテラシーを育成するための授業づくりのポイントについて明らかにしていく。

2.1 ICT活用による映像制作を体験させること

メディアをただ読み手の立場から批判的に分析させるよりも、実際に制作者の立場に立たせてメディア制作を行うことが、自然とメディアを批判的（クリティカル）に読む力を育成できることは、これまでの研究でも明らかにされているところである。しかし、実際には、新聞や広告等のメディア制作を試みた実践はいくつも報告されているものの、映像メディアに関しては、それほどその数は多くない。小学校になるとなおさらである。これは、設備的・時間的な制約により、実際の学校現場で映像制作を進めることは難しかったことが一つの要因であると考えられる。

ところが、近年急速に進む学校現場へのICT機器の導入により、この映像制作が、現実的に可能な活動へと変わりつつある。実際タブレット端末を使えば、これまで一台のテレビに向かって全員で見ていた映像も、個別に自分のタイミングで視聴することができるし、インターネット上の動画も有効に活用することができる。またタブレット端末はカメラとしての機能も備えており、自分で自由に映像を録画したり保存したりすることができる。さらに児童向けの動画編集ソフトも開発されており、これらを有効に活用することで、短時間で手軽に映像制作を行わせることができる。

2.2 児童にとって身近な題材をテーマとすること

どのような題材（テーマ）で児童にメディア制作を行わせるかについては、児童に目的意識をもたせる上で重要な課題である。その際、映像制作においては児童にとって身近に感じられる題材を扱う方がよいと考える。「世界の環境問題を発信しよう」というように遠い題材を扱うと、目的意識が薄れ、意欲もやや衰退する恐れがある。また、身近な題材であれば、自分たちで直接取材ができるという利点もある。中学校や高等学校では上記のようなテーマでの映像制作もよいが、小学校段階では自分たちの学校や地域を題材とする方が、メディア制作には適していると考えられる。

2.3 互いの作品を分析・批評させること

映像を読む力を育てるためには、当然映像を見る場を積極的に設ける必要がある。ただ見るのではなく、何かしら目的意識をもって見るように活動を計画することが大切である。本実践においては、以下の2つの場において、映像を見る活動を取り入れていく。

①自らの映像制作のために、「プロの技を学ぶ」という視点で映像を見る。

②完成した映像をよりよくするために、何が良くて、何を改善すべきかという観点で見る。

3. 実践内容

(1) 単元名 「中通がいっぱい」のCMを作ろう

(2) 対象 所属校第6学年1組（22名）

(3) 単元の目標

自分たちの学校で開発したお菓子のCMを制作することを通して、映像をクリティカル（批判的・建設的）に見る力を身に付けることができる。

(4) 指導計画

①お菓子「中通がいっぱい」の15秒のCMを作成したいという意欲をもつ。（1時間）

②いろいろなCMを視聴・分析し、その特徴を読み取る。（1時間）

③グループごとにCMの企画書を作成する。（1時間）

④グループで撮影・編集を行う。（2時間）

⑤CMの試写会を行う。（1時間）

※事後の活動として、異学年や保護者、地域の方に完成したCMを見ていただく。

(5) 実際の授業について

【第1時 15秒CMを作ろう！】

児童の学習意欲を高めるために、「『中通がいっぱい』のCMを作って、商品のPRをしよう」という活動を投げかけた。「中通がいっぱい」とは、数年前に本校の児童が考案したお菓子であり、今でも実際に市内の菓子店で販売されている。（写真1参照）

菓子店の方に聞いたところ、購入するのは学校関係者か卒業生のみであり、それほど多くの宣伝はされていないようである。そこで、もっとお菓子を有名にする方策として、CMをみんなで作成することを提案した。



写真1
中通がいっぱい

【第2時 CMの特徴を読み取ろう！】

第2時は、CMづくりに向けて、教師が録画したいろいろなCMを視聴し、その特徴を読み取るという活動を行った。導入では、同じ商品にもかかわらず、特徴が全く異なる2つのCMを視聴させ、それぞれどんな違いがあるかを考えさせた。さらに、複数の映像を視聴する中で、CMは、映像・テロップ・ナレーション・音楽という4つの要素から構成されていることや、商品の良さを直接PRしたり歌や映像、短いストーリー等で間接的にPRしたりと、CMにもいろいろなタイプがあることに気付かせることができた。

【第3時 CMを制作しよう(企画編)】

第3～5時では、必要な映像を撮影したり動画編集ソフトを使って、実際に編集をしたりする活動を行った。なお、この段階では、作成技術や情報機器の操作の技術の向上を目指しているのではなく、あくまで映像を作成する立場を経験することで、映像が構成される仕組みやメディアが「構成されたもの」とであるという認識を高めることを目的として活動に取り組ませた。

まずは、前の時間に様々なCMを分類した経験を活かし、それぞれのタイプでどんなCMができるかを話し合わせた上で、企画書を作成させた。

【第4時 CMを制作しよう(撮影編)】

企画書ができると、今度はグループごとにタブレット端末を活用し、撮影を行わせた。制作者の立場に立たせる活動を重視する観点から、すべての撮影を児童自身に任せることにした。

【第5時 CMを制作しよう(編集編)】

自分たちで集めた映像や動画編集ソフトに付属されている音楽等を使って編集を行わせた。今回は、タブレット端末の中にある動画編集ソフト(ジャストスマイルの「ロイロエデュケーション」)を使って、自分たちで編集を行わせた。本ソフトは教育用に作られているため、操作が非常に簡単である。そのため、映像の切り取りや配列、音楽やテロップの挿入、アニメーションの挿入など、すべての作業を児童自身が行うことができた。



写真2：CMづくりの活動の様子

【第6時 完成したCMを見合おう！】

各グループが作成した15秒CMをタブレット端末でお互いに見合い、良い点と改善点を話し合わせた。児童は、全体の構成や音楽、映像、テロップなど、様々な観点から互いの映像を批評し合うことができた。



写真3 視聴の様子

4. 成果

「メディア・リテラシー」というと、とく「批判的に読む(見る)」と思われがちであるが、小学校段階では、「作り手の工夫は何か。なぜそのような工夫をしたのか。改善点は何か。」ということが読めれば十分であるとする。第6時の試写会では、互いの作成した映像について、良い点や改善点を多数挙げる事ができていた。

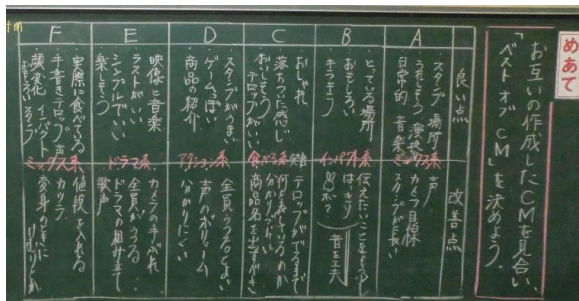


写真4：第6時の板書

また、本実践では、児童の映像の見方の変容を見取るために、事前と事後で同じ商品CMを視聴させて、気が付いたことを自由記述させ、その結果を比較した。

事前に映像を見た際は、「おいしそう」「音楽が流れている」のように、表面的な情報の取り出ししかできていない児童がほとんどであったのに対し、映像制作を行った後に同様のCMを分析させると、「商品をおいしそうに食べたり、アップしたりすることで商品の良さをアピールしている」というように制作者の意図に気付くことができていたり、「音楽と映像が合っている。明るい感じがよく伝わる。」「短い時間できちんとストーリーになっている。分かりやすい。」というように、自分なりに評価を行ったりできるようになっていた。(図1参照)

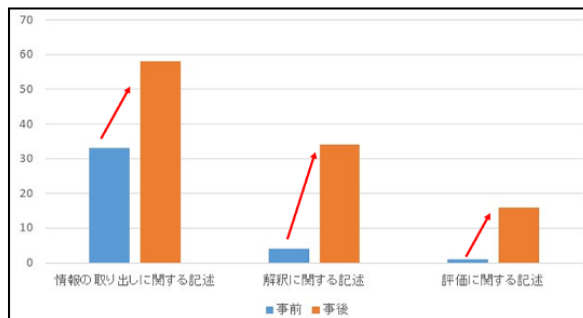


図1：映像の分析に関する事前・事後の記述の比較

また、「CMを作る学習は楽しかったか」という問いに対しては、100%の児童が肯定的な回答していた。このことから、CM制作は児童にとって、楽しく、かつ映像を読む力を高めるに有効な授業だということが出来る。

5. 今後に向けて

今回の実践で、ICTを効果的に活用すれば、映像制作が小学生にも十分に可能であることが明らかになった。そこで今後は、ニュース番組やドキュメンタリー番組等の制作にも取り組ませ、制作者の立場を体験させることで、確かなメディア・リテラシーの力を高めていきたい。